

書籍紹介

吉元昭治 著

『養生外史 不老長寿の思想とその周辺 中国篇』

『養生外史 不老長寿の思想とその周辺 日本篇』

『老荘とその周辺 古代中国医学の源流および道家・道教との関わり』

『不老長寿への旅 ニッポン神仙伝』

著者吉元昭治氏は日本医史学会総会の第81回(1980年)より第119回(2018年)まで38回にわたり、中国伝統医学と道教に関する演題を発表してこられた。東洋医学、中国医学、そして日本漢方に加えて、日本の民俗的なものにおいても、その底流に流れる道教的な哲学と思想の存在を否定するものはいないと考えるが、日本における道教研究は必ずしも多くない。氏によれば日本道教学会における道教医学の研究者は吉元氏一人であったとのことである。氏は産婦人科臨床医としてカンジダの研究から始め、鍼、ダイオード療法、中国古代医学を学ぶ中で40歳以降に独学で道教を学んで発表してきたとのことである。『漢方の臨床』に多数の掲載があり、また生涯にわたる出版書も多数ある。市井の独立した研究者としての研究の進歩と発展を残す意味で上記四書を出版されたと聴く。

日本医史学会の学術大会では、毎回2日目日曜日朝の第1席で発表されていたが、口演内容に対する質問をできる会員は少なかったように記憶している。多忙な臨床医として学会発表後には総会開催地近郊の史跡をめぐり、足で現地や古記録を検証して成した研究も多いと思われる。四書とも

に図・写真に富み後学のものにとり大きな援けとなるものと考えられる。なお『養生外史』は1994年医道の日本社出版本の復刻版、『不老長寿への旅』は1998年集英社出版本の復刻版である。『老荘とその周辺』の「おわりに」として著者は魯迅の言葉「人はしばしば坊主を憎み、尼を憎み、回教徒を憎み、キリスト教徒を憎むが、道士は憎まない。この理屈がわかれば、中国のことは大半わかる」で閉じている。

大変残念であるが吉元昭治氏は2020年9月92歳にて逝去された。謹んでご冥福を祈ります。

(渡部 幹夫)

[たにぐち書店、〒171-0014 東京都豊島区池袋2-68-10、TEL. 03 (3980) 5536、
『養生外史 不老長寿の思想とその周辺 中国篇』、2019年10月、A5判、356頁、5,000円＋税
『養生外史 不老長寿の思想とその周辺 日本篇』、2019年10月、A5判、308頁、4,000円＋税
『老荘とその周辺 古代中国医学の源流および道家・道教との関わり』、2019年12月、A5判、296頁、4,000円＋税
『不老長寿への旅 ニッポン神仙伝』、2020年2月、四六版、272頁、3,000円＋税]

小石家文書研究会 編

『究理堂所蔵 京都小石家来簡集』

本書は、初代元俊・二代元瑞以来、九代にわたって京都で医業に従事してきた究理堂小石家に

所蔵される来簡のうち、精選した医者・蘭学者の書簡88通を、影印(カラー78頁)と先行研究・

語句註・解説などを附した丁寧な翻刻によって紹介し、併せて各編者による論考篇を加えたもの。

第九代小石元紹氏の「刊行によせて」によれば、小石家資料の整理研究は第八代秀夫氏(2009年歿)が宮下三郎氏・多治比郁夫氏と1972年に着手し、『究理堂の資料と解説』(1978年刊)となって纏められたのに始まる(『京都の医学史』資料編に再録)。その後、2007年に正橋剛二氏(2015年歿)らによって「究理堂書簡を読む会」が発足し、年3回のペースで2017年までの約10年に34回の研究会を重ね、本書はその成果として纏められた(海原亮氏「あとがき」)。本会会員として名を連ねられた諸氏(既に故人も多い)による長年の蓄積の上に、本書が結実していることが分かる。「究理堂書簡を読む会」は、主に京都駅前を会場に行われたが、2014~2016年には科研費助成を受けて活性化し、時に富山県・福岡県・山口県・大分県での史料調査が行われたことも記されている。この一年、我々は研究会・資料調査が制限されることに慣らされつつあり、こうした研究会活動の再開が一日も早いことを願わずにはいられない。

収録された書簡の概要を記しておこう。巻頭の「小石家歴代と究理堂書簡の概略」によれば、その所蔵される書簡は全部で35種930通に及ぶ。したがって、今回収録されたのは数量にして全体の10分の1を少し下回る数になる。蘭方医学以外に詩文諸芸に優れた小石元瑞の交友を反映して、頼山陽・田能村竹田・皆川淇園・雲華大舎・篠崎小竹ら江戸後期の著名文人からの来簡が数多く残されており、これらの解明は関係各位によって継続されていくものと思われる。

本書に収録された88通の内訳は、資料名で言えば、『諸家俗牘』から2通、『医家蘭学家俗牘』から21通、『医家俗牘(一)』から23通、『医家俗牘(二)』から22通、『小石家来翰集(一)』から16通、『小石家来翰集(三)』から4通となる。翻刻篇には、差出人ごとに五十音順に翻刻・解説がなされている。順に、赤沢寛輔1通、宇田川玄真1通、宇田川榕庵1通、大槻玄沢4通、緒方洪

庵2通、小田済川11通、小野蘭山13通、桂川甫賢1通、亀井南冥3通、小森桃塙3通、近藤半五郎1通、斎藤方策6通、斎藤良策1通、新宮凉庭2通、杉田玄白10通、辻出羽守1通、坪井信道9通、坪井信良5通、永富数馬2通、長与専斎1通、日野鼎哉6通、広瀬元恭1通、箕作阮甫1通、和田泰純2通となる。

例えば、宇田川玄真の小石元俊宛書簡のなかで(有坂道子氏解説)、究理堂門人を蘭書翻訳の人員として派遣してほしいと依頼して、「漢学有之之人物御折御越被下度(漢学これあるの人物お扱ひお越しくだされたく)」とあるのは、筆者の関心とも共通し、蘭学・洋学が漢学の土台の上に築かれたことを証する資料として興味を惹く。江戸時代の書簡の常として、年代の同定は困難なものであるが、できる限り年代の同定が試みられている点は貴重である。

論考篇の内訳は次の通りである。

- ・青木歳幸氏「自由な気風の亀井南冥塾」
- ・有坂道子氏「小石家と漢蘭折衷医学」
- ・青木歳幸氏「江戸時代のカテーテル」
- ・三木恵里子氏「究理堂にとっての「儒学」」
- ・海原亮氏「東西学問交流の実像一坪井門と究理堂一」
- ・正橋剛二氏「高岡の蘭方医学と究理堂一若干の疑問点一」
- ・海原亮氏／三木恵里子氏「小石中蔵と京都の種痘」
- ・浅井允晶氏「小石元瑞と箕作阮甫一牛痘種痘法普及実現への指針一」

末尾に添えられている関連年表も有用である。

筆者の怠慢により、かかる良書の紹介が遅延してしまったことを会員諸氏にお詫びしつつ、紹介を終える。

(町 泉寿郎)

[思文閣出版、〒605-0089 京都市東山区元町355、TEL. 075(533)6860、2017年12月、B5判、346頁、14,400円+税]